

[B年] 聖霊降臨節第9主日(2026年7月19日)

【旧約聖書日課】サムエル記上 17章(32~37) 38~50節

³²ダビデはサウルに言った。「あの男のことで、だれも気を落としてはなりません。僕が行って、あのペリシテ人と戦いましょう。」³³サウルはダビデに答えた。「お前が出てあのペリシテ人と戦うことなどできはしまい。お前は少年だし、向こうは少年のときから戦士だ。」³⁴しかし、ダビデは言った。「僕は、父の羊を飼う者です。獅子や熊が出て来て群れの中から羊を奪い取ることがあります。³⁵そのときには、追いかけて打ちかかり、その口から羊を取り戻します。向かって来れば、たてがみをつかみ、打ち殺してしまいます。³⁶わたしは獅子も熊も倒してきたのですから、あの無割礼のペリシテ人もそれらの獣の一匹のようにしてみせましょう。彼は生ける神の戦列に挑戦したのですから。」³⁷ダビデは更に言った。「獅子の手、熊の手からわたしを守ってくださった主は、あのペリシテ人の手からも、わたしを守ってくださるにちがいません。」サウルはダビデに言った。「行くがよい。主がお前と共におられるように。」

³⁸サウルは、ダビデに自分の装束を着せた。彼の頭に青銅の兜をのせ、身には鎧を着けさせた。³⁹ダビデは、その装束の上にサウルの剣を帯びて歩いてみた。だが、彼はこれらのものに慣れていなかった。ダビデはサウルに言った。「こんなものを着たのでは、歩くこともできません。慣れていませんから。」ダビデはそれらを脱ぎ去り、⁴⁰自分の杖を手にとると、川岸から滑らかな石を五つ選び、身に着けていた羊飼いの投石袋に入れ、石投げ紐を手にして、あのペリシテ人に向かって行った。

⁴¹ペリシテ人は、盾持ちを先に立て、ダビデに近づいて来た。⁴²彼は見渡し、ダビデを認め、ダビデが血色の良い、姿の美しい少年だったので、侮った。⁴³このペリシテ人はダビデに言った。「わたしは犬か。杖を持って向かって来るのか。」そして、自分の神々によってダビデを呪い、⁴⁴更にダビデにこう言った。「さあ、来い。お前の肉を空の鳥や野の獣にくれてやろう。」⁴⁵だが、ダビデもこのペリシテ人に言った。「お前は剣や槍や投げ槍でわたしに向かって来るが、わたしはお前が挑戦したイスラエルの戦列の神、万軍の主の名によってお前に立ち向かう。」⁴⁶今日、主はお前をわたしの手に引き渡される。わたしは、お前を打ち、お前の首をはね、今日、ペリシテ軍のしかばねを空の鳥と地の獣に与えよう。全地はイスラエルに神がいますことを認めるだろう。⁴⁷主は救いを賜るのに剣や槍を必要とはされないことを、ここに集まったすべての者は知るだろう。この戦いは主のものだ。主はお前たちを我々の手に渡される。」

⁴⁸ペリシテ人は身構え、ダビデに近づいて来た。ダビデも急ぎ、ペリシテ人に立ち向かうため戦いの場に走った。⁴⁹ダビデは袋に手を入れて小石を取り出すと、石投げ紐を使って飛ばし、ペリシテ人の額を撃った。石はペリシテ人の額に食い込み、彼はうつ伏せに倒れた。⁵⁰ダビデは石投げ紐と石一つでこのペリシテ人に勝ち、彼を撃ち殺した。ダビデの手には剣もなかった。

【使徒書日課】コリントの信徒への手紙二 6章1~10節

¹わたしたちはまた、神の協力者としてあなたがたに勧めます。神からいただいた恵みを無駄にしてはいけません。²なぜなら、

「恵みの時に、わたしはあなたの願いを聞き入れた。

救いの日に、わたしはあなたを助けた」

と神は言っておられるからです。今や、恵みの時、今こそ、救いの日。³わたしたちはこの奉仕の務めが非難されないように、どんな事にも人に罪の機会を与えず、⁴あらゆる場合に神に仕える者としてその実を示しています。大いなる忍耐をもって、苦難、欠乏、行き詰まり、⁵鞭打ち、監禁、暴動、労苦、不眠、飢餓においても、⁶純真、知識、寛容、親切、聖霊、偽りのない愛、⁷真理の言葉、神の力によってそうしています。左右の手に義の武器を持ち、⁸榮譽を受けるときも、辱めを受けるときも、悪評を浴びるときも、好評を博するときにもそうしているのです。わたしたちは人を欺いていないように、誠実であり、⁹人に知られていないように生きており、罰せられているようで、殺されてはならず、¹⁰悲しんでいるようで、常に喜び、物乞いのようで、多くの人を富ませ、無一物のようで、すべてのものを所有しています。

【福音書日課】マルコによる福音書 9章14~29節

¹⁴一同がほかの弟子たちのところに来てみると、彼らは大勢の群衆に取り囲まれて、律法学者たちと議論していた。¹⁵群衆は皆、イエスを見つけて非常に驚き、駆け寄って来て挨拶した。¹⁶イエスが、「何を議論しているのか」とお尋ねになると、¹⁷群衆の中のある者が答えた。「先生、息子をおそばに連れて参りました。この子は霊に取りつかれて、ものが言えません。」¹⁸霊がこの子に取りつくくと、所かまわず地面に引き倒すのです。すると、この子は口から泡を出し、歯ぎしりして体をこわばらせてしまいます。この霊を追いついてくださるようにお弟子たちに申しましたが、できませんでした。」¹⁹イエスはお答えになった。「なんと信仰のない時代なのか。いつまでわたしはあなたがたと共にいられようか。いつまで、あなたがたに我慢しなければならぬのか。その子をわたしのところに連れて来なさい。」²⁰人々は息子をイエスのところに連れて来た。霊は、イエスを見ると、すぐにその子を引きつけさせた。その子は地面に倒れ、転び回って泡を吹いた。²¹イエスは父親に、「このようになったのは、いつごろからか」とお尋ねになった。父親は言った。「幼い時からです。」²²霊は息子を殺そうとして、もう何度も火の中や水の中に投げ込みました。おできになるなら、わたしどもを憐れんでお助けください。」²³イエスは言われた。「『できれば』と言うか。信じる者には何でもできる。」²⁴その子の父親はすぐに叫んだ。「信じます。信仰のないわたしをお助けください。」²⁵イエスは、群衆が走り寄って来るのを見ると、汚れた霊をお叱りになった。「ものも言わず、耳も聞こえさせない霊、わたしの命令だ。この子から出て行け。二度とこの子の中に入るな。」²⁶すると、霊は叫び声をあげ、ひどく引きつけさせて出て行った。その子は死んだようになったので、多くの者が、「死んでしまった」と言った。²⁷しかし、イエスが手を取って起こされると、立ち上がった。²⁸イエスが家の中に入られると、弟子たちはひそかに、「なぜ、わたしたちはあの霊を追いつけなかったのでしょうか」と尋ねた。²⁹イエスは、「この種のものは、祈りによらなければ決して追いつくことはできないのだ」と言われた。

「聖書協会共同訳」(2018年版)読み比べ

サムエル記上 17章(32～37節)38～50節

³²ダビデはサウルに言った。「あの男のことで、誰も気落ちしてはなりません。あなたの僕が行って、あのペリシテ人と戦いましょう。」³³サウルはダビデに言った。「お前が出て行って、あのペリシテ人と戦うことなどできない。お前は少年だし、彼は少年のときからの戦士なのだ。」³⁴しかしダビデはサウルに言った。「あなたの僕は、父の羊を飼う者です。ライオンや熊が出て来て、群れの中から羊を奪うこともあります。³⁵その時は追いかけて打ちかかり、その口から羊を取り戻します。向かって来れば、たてがみをつかみ、打ち殺してしまいます。³⁶僕はライオンも熊も打つ殺してきました。ですから、あの無割礼のペリシテ人もあの獣のようにしてみせます。生ける神の戦列を嘲笑ったのですから。」³⁷ダビデはさらに言った。「ライオンの手、熊の手から私を救い出してくださった主は、あのペリシテ人の手からも、私を救い出してくださいます。」サウルはダビデに言った。「行くがよい。主がお前と共におられるように。」³⁸サウルは、ダビデに自分の装束を着せ、青銅の兜をその頭に載せ、身には鎧を着けさせた。³⁹ダビデはその装束の上にサウルの剣を帯びて歩いてみた。だが彼はこれらのものに慣れていなかった。ダビデはサウルに言った。「こんなものを着たのでは、歩くこともできません。慣れていませんから。」ダビデはそれらを脱ぎ去ると、⁴⁰自分の杖を手にとった。そして川岸で滑らかな石を五つ選び、身に着けていた羊飼いの袋に入れ、石投げを手にして、あのペリシテ人に近寄った。

⁴¹ペリシテ人は、盾持ちを先に立て、一步一步ダビデに近づいて来た。⁴²彼は眼を据えてダビデを見たが、ダビデが容姿端麗で血色の良い少年だったので侮った。⁴³そのペリシテ人はダビデに言った。「私は犬か。杖を持って私に向かって来るとは。」そして自分の神々によってダビデを呪い、⁴⁴ダビデに言った。「さあ掛かって来い。お前の肉を空の鳥、野の獣にくれてやろう。」⁴⁵ダビデはそのペリシテ人に言った。「お前は剣や槍や投げ槍で私に向かって来るが、私はお前が挑戦したイスラエルの戦列の神、万軍の主の名によって、お前に立ち向かう。」⁴⁶今日、主はお前を私の手に渡される。私はお前を討ち、その首をはね、今日、ペリシテ軍の屍を空の鳥と地の獣に与える。全地はイスラエルに神がおられることを知るだろう。⁴⁷主が救いを賜うのに剣や槍を必要とはされないことを、ここに集まったすべての者は知るだろう。この戦いは主の戦いである。主はお前たちを我々の手に渡される。」

⁴⁸すると、そのペリシテ人は立ち上がり、ダビデと戦おうとして近づいて来た。ダビデはすぐさまそのペリシテ人に立ち向かうため戦いの場に走った。⁴⁹ダビデは袋に手を入れて石を取り出すと、石投げひもを使ってペリシテ人目がけて飛ばし、その額を撃った。石はペリシテ人の額に食い込み、彼はうつ伏せに倒れた。⁵⁰こうしてダビデは石投げと一個の石でそのペリシテ人に勝ち、彼を撃ち殺した。ダビデの手には一振りの剣もなかった。

コリントの信徒への手紙二 6章1～10節

¹私たちはまた、神と共に働く者として勧めます。神の恵みをいたずらに受けてはなりません。²なぜなら、

「私は恵みの時に、あなたに応え救いの日に、あなたを助けた」。

と神は言っておられるからです。今こそ、恵みの時〔別訳→好ましい時〕、今こそ、救いの日です。³私たちは、この奉仕の務めについて、とやかく言われぬように、どんなことにも人にとまづきを与えず、⁴あらゆる場合に自分を神に仕える者として推薦しているのです。大いなる忍耐をもって、苦難、困窮、行き詰まりにあっても、⁵鞭打ち、投獄、騒乱、労苦、不眠、空腹にあっても、⁶純潔、知識、寛容、親切、聖霊、偽りのない愛によって、⁷真理の言葉、神の力によってそうしています。また、左右の手に持った義の武器によって、⁸栄誉を受けるときも、侮辱を受けるときも、不評を買ったときも、好評を博するときにも、そうしているのです。私たちは人を欺いているようであり、真実であり、⁹人に知られていないようであり、よく知られ、死にかけているようであり、こうして生きており、懲らしめを受けているようであり、殺されず、¹⁰悲しんでいるようであり、常に喜び、貧しいようであり、多くの人を富ませ、何も持たないようであり、すべてのものを所有しています。

マルコによる福音書 9章14～29節

¹⁴一同がほかの弟子たちのところに来てみると、彼らは大勢の群衆に取り囲まれて、律法学者たちと議論していた。¹⁵群衆は皆、イエスを見つけて非常に驚き、駆け寄って来て挨拶した。¹⁶イエスが、「何を議論しているのか」とお尋ねになると、¹⁷群衆の一人が答えた。「先生、息子をおそばに連れて参りました。この子は霊に取りつかれて、ものが言えません。」¹⁸霊がこの子を襲うと、所構わず引き倒すのです。すると、この子は泡を吹き、歯ぎしりして体をこわばらせてしまいます。この霊を追い出してくださいようにお弟子たちに申しましたが、できませんでした。」¹⁹イエスはお答えになった。「なんと不信仰な時代なのか。いつまで私はあなたがたと共にいられようか。いつまで、あなたがたに我慢しなければならぬのか。その子を私のところに連れて来なさい。」²⁰人々はその子をイエスのところに連れて来た。霊は、イエスを見ると、すぐにその子に痙攣を起こさせた。その子は地面に倒れ、泡を吹きながら転げ回った。²¹イエスは父親に、「いつからこうなったのか」とお尋ねになった。父親は言った。「幼い時からです。」²²霊は息子を滅ぼそうとして、何度も息子を火の中や水の中に投げ込みました。もしできますなら、私どもを憐れんでお助けください。」²³イエスは言われた。「『もしできるなら』と言うのか。信じる者には何でもできる。」²⁴その子の父親はすぐに叫んだ。「信じます。信仰のない私をお助けください。」²⁵イエスは、群衆が走り寄って来るのを見ると、汚れた霊をお叱りになった。「ものを言わず、耳も聞かぬさえない霊。私の命令だ。この子から出て行け。二度と入って来るな。」²⁶すると、霊は叫び声を上げ、ひどく痙攣を起こさせて出て行った。その子は死人のようになったので、多くの者が、「死んでしまった」と言った。²⁷しかし、イエスが手を取って起こされると、立ち上がった。²⁸イエスが家に入られると、弟子たちはひそかに、「なぜ、私たちはあの霊を追い出せなかったのでしょうか」と尋ねた。²⁹イエスは、「この種のは、祈り〔異本→祈りと断食〕によらなければ追い出すことはできないのだ」と言われた。

黙想のためのノート**次主日の教会暦と聖書日課**

・7月19日「聖霊降臨節第9主日」の日課主題は「」
 ・旧約日課は、「サムエル記上」から、ダビデとゴリアトの一騎打ちを物語る説話伝承箇所。使徒書日課は、「コリントの信徒への手紙二」から、パウロが「神の協力者」としてのキリスト者の使命観を教える箇所。福音書日課は、「マルコによる福音書」から、弟子たちの癒せなかった悪霊憑きの子を主イエスが癒された際になされた対話を伝える説話箇所。

旧約日課(サムエル上 17章より)

・「サムエル記」は、ユダヤ正典(ヘブライ語聖書)の区分で「前の預言者」の第三に置かれた歴史物語文書で、イスラエルのカナン地方定住時代を展開する正史物語の中で、預言者サムエルによってサウル、次いでダビデが王として立てられていった王国草創の時代を物語る。便宜上、上巻と下巻に分けて扱われてきており、上巻にはサウル王の死までが、下巻にはダビデが王として立てられる出来事以降が含まれる。本書は、元来、「預言者サムエル伝承」、「サウル王伝承」、「ダビデ王伝承」など、異なる伝承系譜にある伝承物語が組み合わせられて編集されたものと推認され、一部に時系列の不整合が見られる。
 ・日課箇所を含む17章全体は、「ダビデとゴリアトの一騎打ち」の逸話として一つの伝承説話を成している。おそらく、すでに良く知られた伝承説話として完結した逸話がここに置かれたものと考えられる。この伝承説話で、ダビデは、サウル王のもとでペリシテ軍と戦闘状態にあるイスラエル軍に従軍している兄たちに糧食を届け安否を確かめるために登場するが、まだ戦士として従軍するには早い少年として描かれている。ところが、前段 16:14~23 でダビデが堅琴の奏者としてサウル王に仕えるようになった説話では、すでに「勇敢な戦士で、戦術の心得もあり」(16:18)と紹介され、「王はダビデが大層気に入り、王の武器を持つ者に取り立てた」(16:21)と描かれ、ダビデがすでに戦士として描かれている。おそらく、「ダビデ王伝承」群に複数の完結した出世譚が含まれており、それらを整合させることなく配置したものなのだろう。
 ・日課箇所「ペリシテ人」とだけ表示される一騎打ちの相手は、この説話の序盤で「ガト出身」の「ゴリアト」として紹介されている(4,8,23節)。「ペリシテ人」は、前13世紀ごろに「海の民」として地中海沿岸地域に移入・定住するようになった集団を指す呼称で、エジプトが北方防衛のために軍備支援をしていたともされる人々。ユダおよびイスラエルの王国形成は、この「ペリシテ人」の軍事的脅威に対抗する意味合いが大きく、サウル王およびダビデ王の物語の中でも繰り返し、ペリシテ人との紛争が描かれている。本書下巻の終盤にダビデ王時代のペリシテ人との紛争についてまとめた箇所があるが(下 21:15~22)、そこにも敵将として「ガト人ゴリアト」の名や「巨人」の描写が見られ、日課箇所の逸話は、「少年ダビデの英雄譚」を意図的に誇張するために「ガト人ゴリアト」の逸話と組み合わせられて語られるようになったものかもしれない(代上 20:5 の矛盾解消も参照)。

使徒書日課(Ⅱコリント 6章より)

・「コリントの信徒への手紙二」は、「パウロ書簡集」の第三に置かれた書簡文書。「手紙一」と共に、パウロがコリントの教会共同体に宛てて書き送った一連の書簡の一つで、「手紙一」が送られた後、別の書簡(複数?)のやり取りが為された末に送られた書簡と考えられる。一部の聖書学者は、8~9章などを別書簡からの挿入とみなす場合がある。
 ・パウロとコリント教会の関わりは、「使徒言行録」18章および19章などの記述から推認される。それによれば、パウロは、シリア・アンティオキア教会から派遣されていたバルナバ宣教団を離れて独自の宣教団を組織して進めたマケドニア伝道(フィリピ、テサロニケ、ペロアなど)で必ずしも大きな成果を上げられないままアテネに至り(使徒 17章)、そこで直接的な異邦人伝道にも失敗していた。その失意のうちに辿り着いたコリントで、パウロは当初、宣教活動に携わらずに、ローマから移住してきていたユダヤ人キリスト者である夫妻アキラとプリスキラの家に住み込み、彼らの天幕づくりの仕事を手伝うなどしていた。ところが、しばらくしてから、おそらくこの夫妻同様にローマから移住してきていたキリスト者らが始めていた同地の複数の会堂での宣教活動に参加するようになり、次第に指導的な立場を取るようになったと考えられる。このような経緯から、コリントの教会共同体は、ローマ教会共同体の指導的立場にあったペトロ(ケファ)の影響を強く受けながら、地中海貿易のハブ港都市として世界各地のユダヤ人が出入りする地の教会として、パウロだけでなく、エジプト・アレクサンドリア出身の宣教者アポロなど、さまざまな宣教者を広く指導者として受けとめる共同体として形成されることになったと考えられる。このような共同体として、内部にはさまざまな立場や考え方の異なる者たちが混在しており、それゆえの混乱も絶えなかったと推認され、そのような実情を憂う者たちの中にコリントを離れていたパウロの助言を求める者があり、それに応える形でパウロは「手紙一」を端緒とする書簡のやり取りをするようになった。しかし、そのやり取りにおいて相互の認識の齟齬から信頼関係が崩れたため、パウロは、その関係を修復するために、福音の中心に「赦しと和解」があることを示す目的で、本書簡を著したと考えられる。
 ・日課箇所は、その「赦しと和解の福音」という中心的主題を端的に示したこと(前段 5:11~21)を踏まえて、それに基づいて自身を含むキリスト者が「神の協力者」としてどのような自己理解に立ち、振舞うべきであるかを語ろうとしている。
 ・1節「神の協力者(シュネルグエース)」は珍しい表現であるが、同じ用語を用いて、「…ご計画に従って召された者たちには、万事が益となるように共に働く」(ロマ 8:28)と語る場合と通底した考え方による。
 ・3節「奉仕の務め(ディアコニア)」は、「パウロ書簡集」で広く用例が認められるが、その半数(23例中12例)が本書簡中で用いられており(3:7,8,9, 4:1, 5:18, 6:3, 8:4, 9:1,12,13, 11:8)、本書簡においてパウロが向き合う主題と深く関わる事柄を示す用語と言える。

福音書日課(マルコ 9 章より)

・日課箇所は、主イエスが不在の場で弟子たちが悪霊に取りつかれた子の癒しを求められながら失敗しているところに主イエスが戻られ、癒しをしてくださったという出来事の中で展開された対話を伝える説話。共観福音書(マタイ、マルコ、ルカ)が共通して伝えており、「ペトロの信仰告白」を端緒に展開する「主イエスの受難予告」から始まる一連の説話物語の一部を構成している。

・この場面は、不在であった主イエスが弟子たちの集団のもとに戻って来られたことから物語りが始められている。主イエスは、「受難予告」をされたときから一週後に三人の弟子たちだけを連れて「高い山」に登られ、そこで白く輝く姿に変貌してモーセとエリヤに会い、「これはわたしの愛する子。これに聞け」という天からの声を弟子たちに聞かせられた(9:2~9)。その山から下りて来られて、他の弟子たちのいるところに合流したというのが、この場面である。つまり、この場面の中で悪霊に憑かれた子を癒せずにいた弟子たちというのは、主イエスが高い山に登られていたときに麓に残されていた弟子たちであり、空間的な対比と共に、「主イエスと共にいる(三人の)弟子」と「主イエスと共にいない(他の)弟子」が対照されている。

・にもかかわらず、ここで展開されている対話は、「主イエスの在不在」を事柄の中心に据えているわけではない。むしろ、「主イエスの在不在」にかかわらず(19 節「いつまでわたしはあなたがたと共にいられようか」)、「弟子たち」が主イエスのように癒しの御業を為せる者になることを期待されているのだと、主イエスの発言は向かっている。ただし、この説話は、焦点を弟子たちだけでなく、癒しを願うその子の父親にも向けており、事柄を単純に「弟子たちの(信仰の)ありよう」として答えようとはしていない。

・子の癒しを求めた父親は、主イエスからその信仰を問われている(23~24 節)。実のところ、主イエスが癒しの奇跡をなさることについても、福音書は、その受け手の信仰が前提になることを繰り返して示している(6:5~6 など)。そこで、弟子たちの失敗の原因の一つは、彼らがその父親との間で信仰を共有できなかったことにあった、という見方がされているのである。

・それを踏まえて、主イエスは、弟子たちの最後の問いに対して、「この種のものは、祈りによらなければ…」と答えられている。つまり、ここで「祈り」と言われていることは、単に弟子たち本人の敬虔としての「祈り」ではなく、父親との間に信仰を共有する信頼関係を築くための方途としての「祈り」であると解される。

来週の誕生日 (7 月 19 日~25 日)**主日礼拝の讃美歌から**

・21-3「扉を開きて」(= I 61「かがやくみとのよ」)は、17-18 世紀ドイツのカトリックと対立の激しい地方で牧師となった多作の讃美歌作家シュモルクの作詞。曲は、17 世紀ドイツの改革派の牧師ネアンダー(本名はノイマン)が詩編歌用に作曲。ネアンダーが住んだデュッセルドルフ近郊の谷は、彼にちなんで

「ネアンデル谷」と呼ばれるようになったが、そこで発見されたヒトの化石が「ネアンデルタール人」。

・21-451「くすしきみ恵み」(= II 167「われをもすくいし」)は、ゴスペルソング「アメージング・グレース」で知られる。作詞は、奴隷船船員として働いていた際に遭遇した暴風雨の中で回心し英国教会の司祭となったジョン・ニュートン。ウェスレー兄弟に続く世代。曲は、19 世紀初頭から米国南部で歌われていた民謡が原曲。

・21-514「美しい天と地の造り主」(= I 449)は、20 世紀カナダで YWCA 活動に従事したメアリー・エドガーがキャンプソングとして作詞した歌詞。曲は、19 世紀英国教会司祭ブリンジャーが趣味で作曲して残した曲の一つ。

21-3「扉を開きて」**Tut mir auf die schöne Pforte**

- 1) Tut mir auf die schöne Pforte, / führt in Gottes Haus mich ein; / ach wie wird an diesem Orte / meine Seele fröhlich sein! / Hier ist Gottes Angesicht, / hier ist lauter Trost und Licht.
- 2) Ich bin, Herr, zu dir gekommen, / komme du nun auch zu mir. / Wo du Wohnung hast genommen, / da ist lauter Himmel hier. / Zieh in meinem Herzen ein, / laß es deinen Tempel sein.
- 3) Laß in Furcht mich vor dich treten, / heilige du Leib und Geist, / daß mein Singen und mein Beten / ein gefällig Opfer heiß. / Heilige du Mund und Ohr, / zieh das Herze ganz empor.
- 4) Mache mich zum guten Lande, / wenn dein Samkorn auf mich fällt. / Gib mir Licht in dem Verstande / und, was mir wird vorgestellt, / präge du im Herzen ein, / laß es mir zur Frucht gedeihn.
- 5) Stärk in mir den schwachen Glauben, / laß dein teures Kleinod mir / nimmer aus dem Herzen rauben, / halte mir dein Wort stets für, / daß es mir zum Leitstern dient / und zum Trost im Herzen grünt.
- 6) Rede, Herr, so will ich hören, / und dein Wille werd erfüllt; / nichts laß meine Andacht stören, / wenn der Brunn des Lebens quillt; / speise mich mit Himmelsbrot, / tröste mich in aller Not.

21-451「くすしきみ恵み」= II-167**Amazing Grace! How Sweet the Sound**

1. Amazing grace--how sweet the sound-- / That saved a wretch like me! / I once was lost but now am found, / Was blind, but now I see!
2. The Lord has promised good to me, / His Word my hope secures; / He will my shield and portion be / As long as life endures.
3. Through many dangers, toils and snares, / I have already come; / His grace has brought me safe thus far, / His grace will lead me home.
4. Yes, when this flesh and heart shall fail / And mortal life shall cease, / Amazing grace shall then prevail / In heaven's joy and peace.
5. When we've been there ten thousand years, / Bright shining as the sun, / We've no less days to sing God's praise / Than when we'd first begun.

21-514「美しい天と地の造り主」**God, who touchest earth with beauty**

1. God who touchest earth with beauty, / Make my heart anew; / With thy Spirit recreate me / Pure and strong and true.
2. Like thy springs and running waters, / Make me crystal pure; / Like thy rocks of towering grandeur, / Make me strong and sure.
3. Like thy dancing waves in sunlight, / Make me glad and free; / Like the straightness of the pine trees / Let me upright be.
4. Like the arching of the heavens, / Lift my thoughts above; / Turn my dreams to noble action, / Ministries of love.
5. Like the birds that soar while singing, / Give my heart a song; / May the music of thanksgiving / Echo clear and strong.
6. God who touchest earth with beauty, / Make my heart anew; / Keep me ever by thy Spirit / Pure and strong and true.